

「吉久まちづくりプロジェクト I・II」

2022 年度取組み

Studio “Community Design Project in Yoshihisa I・II”

●田邊元、藪谷祐介／富山大学学術研究部芸術文化学系

TANABE Gen, YABUTANI Yusuke / Faculty of Art and Design, University of Toyama

●Key Words: まちづくり、地域デザイン、地域活性化、コミュニティ、住民参加、官民共同、地域課題解決

1. はじめに

本稿は、富山大学芸術文化学部において2022年度から開講されたプロジェクト授業「吉久まちづくりプロジェクト I・II」（以下、本講義）について、本年度の報告を行うものである。2022年度は開講初年度であるため、本プロジェクト授業全体の目的を示したうえで、本年度実施されたプロジェクトの報告を行う。

2. 「吉久まちづくりプロジェクト I・II」について

高岡市吉久（以下、吉久）は、2020年に重要伝統的建造物群保存地区に選定された。選定は、これまでのNPO法人吉久みらいプロジェクト（以下、NPO）や吉久まちづくり推進協議会（以下、協議会）を中心とした地域住民と高岡市教育委員会（以下、高岡市）による継続的な活動成果である。一方でまちづくりの担い手の高齢化が深刻化し、今後の持続的なまちづくりに向けて、いかに若者の参加を促すことができるかが喫緊の課題である。特に、吉久は伝統的な町並みや獅子舞等の歴史文化が今なお残る地域であり、そうした地域特性を生かしたまちづくりが求められている。以上の背景を踏まえ、本講義はフィールドワークを通じて吉久の地域特性を解説し、吉久らしい豊かな暮らしを実現するための小さなアクションを学生が地域住民、NPO、協議会、高岡市と協働しながら、企画立案・実践・検証するために開講された。

本講義のIは基礎編と位置付け、吉久の地域特性を理解し、他者との協働プロジェクトの進め方を理解することを目指す。一方で、本講義のIIは応用編であり、企画立案した小さなアクションを実施し、その効果検証を行う能力を修得することを目指す。特に、IIではグループワークにおいては主導的役割を担うことが期待されている。本講義の履修者は2年生以上、開講期間は通年であり、年間を通して活動を継続する。2年連続で履修することで、断続的なフィールドワークや実践を長期間にわたり実施することを狙いとしている。

講義は2週間に1回の頻度で年間を通じて実施し、受講学生たちが、それぞれにその2週間の間に行った活動の報告をし、それに対してディスカッションを行い進めた。また、年間を通じて3回の住民報告会を実施した。

3. 2022年度における取組み

初年度である2022年度は、2022年4月～7月の間に学生たちの興味関心と、フィールドワークを通じた聞き取りから分かった、吉久の課題のすり合わせを行った。その後、学生たちは2つのグループに別れ、それぞれに課題を設定し、実践した。また、2023年2月には実践の結果や課題の報告を行った。

以下、それぞれのグループごとに、その実践を示す。

3.1 「よっさ！まんど市」グループ

本グループは、フィールドワークを通じて以下の3つの目的を立てた。すなわち、夜の賑わいが少ない、空き家が多い、町内交流の減少などの吉久の現状に対し、①「光」を用いて夜の町家の通りを彩ること、②空き家に比べて活用のハードルの低い軒下の活用方法を提案すること、③多世代でコミュニケーションを取る機会を設けることである。以上の目的に対して、(1)ランプを制作するワークショップと、(2)ランプで吉久の夜を彩るイベント「よっさ！まんど市」を企画した。具体的には、11月12日（土）にランプ作りワークショップ、11月23日（水祝）にまんど市を開催した。本グループの名称にも使用される「まんど」とは灯りを指す言葉であり、上記の目的に合わせて学生たちが選んだ言葉である。

(1)では、まんど市当日さまのこに飾るランプを制作した。作業を通じて住民同士の交流を図ることを目的として行った。ランプ作りは、事前に用意した牛乳パックのパッケージを剥がした土台に墨でイラストを描き、組み立てるというものであり、手軽かつ低予算で幅広い世代が楽しむことができ、それぞれの個性がありながらもさまのこの街並みになじむ雰囲気も持ち合わせるものが生まれた。ワークショップには、地域の小学生からお年寄り、芸術文化学部学生、たまたま吉久を訪れた人など様々な属性の参加者が参加し、多世代・地域内外の交流が生まれる場となった。

(2)では、夜の吉久の街並みを光でさらに魅力的な街並みにすること、さらに町家の軒下の活用ハードルが低いことから、空き家活用につなげることを目的とした。当日は吉久を貫く街道である放生津往来沿いの

各住宅の軒下、カーポート等に (1) で制作したランプの展示と、吉久住民と共同してシチュー・豚汁とおにぎりのセット等の食事の販売を行った。当日は天候には恵まれなかったが、吉久住民や吉久外の人々、富山大学生など多くが来場し、夜間の吉久の人通り・交流の創出につながった。また、軒下という、これまで活用されていなかったスペースの可能性を見出すことができた。

3.2 「逃げ地図作成」グループ

本グループはフィールドワークを通じて、以下の点について課題を見いだした。すなわち、吉久は小矢部川と庄川という2つの大きな川に挟まれた地域であり、洪水による災害が発生する可能性が高いながら、高齢化の進行や、地域住民間の関係性が希薄化しているために、避難の際に不安がある。以上を踏まえ、避難のシミュレーションを行いつつ、住民同士の関係性構築のためのワークショップを開催することとした。その際に、「逃げ地図」¹⁾の制作を行うことで、その交流を促す方法を探った。ワークショップは2回開催した。

第一回ワークショップでは、吉久連合自治会の協力を得て、「避難目標地点の候補地（避難する場所）」と「避難障害地点（避難する際に危険な場所）」について、車で避難する前提で話し合った。話し合った際に「海抜」、「学生の現地調査で分かったこと」、「浸水範囲」を参考にして、避難目標地点と避難障害地点について考えた。その結果、避難目標地点の候補地は13個、避難障害地点は3個出てきた。ワークショップでは、互いの意見に納得し、そこから話が広がっていく場面が多く見られ、日常生活で気が付かないような危険を共有する機会を生むことができた。

第二回ワークショップは、吉久連合自治会に加え、各町内から2名の方に参加を募り開催した。今回は第一回で頂いた意見を踏まえ、避難方法を車から徒歩に変更した。参加者を居住地によりグループ分けし、それぞれに「避難障害地点の設定」、「逃げ地図作成」を行ったあとに、実際に「避難」を想定して、作成したルート歩いた。「避難障害地点の設定」では、徒歩での避難に変更したことで、前回よりも、より多くの危険な場所の意見が出た。「逃げ地図作成」やルート歩くことを通じて、住民同士の交流が生まれた様子もみられ、災害に対する意識の向上の必要性が共有された様子もみられた。

参考文献

- 1 逃げ地図マニュアル [地域版]、<http://www.loto-lab.com/ngczlm/> (2023.08.31 閲覧)。



写真1 ランプ作りワークショップ



写真2 よっさ!まんど市



写真3 逃げ地図ワークショップ



写真4 ワークショップで作成したルート歩く様子